

## 知識状態から見る中国語文末詞「的」の文法機能

## —日本語の「の(だ)」との比較を通して—

黄祺佳 (名古屋大学大学院) ・ 堀江薫 (名古屋大学)

## 1. はじめに

会話は多くの社会的行為がなされる場であり、様々な言語使用の中で最も基礎的なものである (Langacker 2008: 459)。しかし、これまでの言語研究は、主に書き言葉のコーパスに基づいた研究が盛んであるが、会話の中で用いられる言語資源に注目する研究は十分ではない。近年、日常会話をデータとし、会話分析 (conversational analysis) の手法を用いて言語資源を研究する、相互行為言語学 (interactional linguistics) という分野が盛んになりつつある。その目的は、日常会話の文法知識が話し手と聞き手の相互行為において、どのような役割を担っているかを明らかにすることである。本研究は、相互行為言語学の考え方を取り入れ、日常会話において出現頻度が高い中国語の文末詞「的」及び日本語の「の(だ)」の会話における機能を明らかにする。

中国語の「的」及び日本語の「の(だ)」は、これまで数多くの対照研究があるが、主に「名詞と名詞との間の関係を限定する機能 (朱 1980)」、「名詞化する機能 (郭 2000)」、「強調構文 (杉村 1982)」を中心に行われてきた。しかし、「的」と「の(だ)」のもう一つの共通点には「文末において対事的・対人的態度を表す」という機能もあり、これについて論じた研究はあまり多くない。「対事的・対人的態度」を考察する場合、これまでの先行研究がなされたように、ただ一つの中日対訳文の中で観察し比較するだけでは不十分で、会話の前後の文脈、及び聞き手の反応なども含めて考察するべきだと考えられる。

本研究は、相互行為言語学の考え方を取り入れ、「的」と「の(だ)」が「対事・対人的態度」を表すときに、それぞれどのような発話環境に現れ、どのような目的・意図として使われるかについて考察する。具体的には、会話分析研究において用いられる相互行為における参加者間の相対的な知識状態「認識ステータス (epistemic status)」等の概念を援用し、「的」と「の(だ)」の会話における機能を比較対照する。

## 2. 研究方法

## 2.1 分析方法

## 2.1.1 知識状態及び情報伝達発話

本節では、「認識ステータス」、「評価連鎖 (assessment sequence)」など、本研究で用いる、会話

分析の概念を説明する。

Heritage (2012) は、会話参加者間に存在する相対的な知識状態における不均衡が、行為連鎖を生み出す原動力の一つとして働いていると主張している。会話参加者間に存在する相対的な知識状態のバランスをとるように、行為連鎖を発動する手段は、話し手の知識状態が優位にある (K+) か、劣位にある (K-) かにより、二種類に分けられる。一つ目は、「話し手が自分を相対的に知識状態が優位のポジションに置き、手元の証拠や情報を用いて聞き手の知識状態を自分と同等なレベルに導く」という手段である。二つ目は、「話し手が自分を相対的に知識状態が劣位のポジションに置き、知識状態が優位にある聞き手に質問や確認を要求することで、情報を得る」という手段である。知識状態が最も反映できる枠組みとして、「情報伝達発話」という概念がある。「情報伝達」とは、新しい情報、あるいは価値のある情報・考え方を聞き手に伝える行為である。告知、アドバイス、物語る等が含まれる (Hayano 2013: 99; 訳は筆者)。

中国語文末詞の「的」と「の(だ)」文は、いずれも発話者と受け手との間の「知識状態」を反映できると考えられる。そこで、本研究では、以上の理論的枠組みを用いて、中国語と日本語の会話においてどの手段で発動し、どのような行為を成し遂げるかについて分析する。

## 2.1.2 評価連鎖

Pomerantz (1984) は、会話の中で話し手がある対象物・事柄に対して評価的スタンスをとるときに、第一評価を作ることにより聞き手の評価への参与を要請し、聞き手が次のターンにおいて、該当する対象物・事柄に第二評価を作る、という評価連鎖の典型的なパターンがあると主張している。評価連鎖は「評価対象」「第一評価」「第二評価」「協議」という四つの部分からなると考えられる。「評価対象」には既に先行文脈において会話内に導入されていた場合もある。「第一評価」の直後には同意/不同意を表明する「第二評価」が生起し、「第一評価」と「第二評価」の間には「同意要求的」関係がある。「第二評価」が不同意の場合、「協議」が生じる。

中国語文末詞の「的」及び「の(だ)」とも客観情報に対する各参加者の評価や意見といった知識状態の

主張（認識スタンス）を提示できる。本研究は、二つの表現は評価連鎖のパターンの中でどのような働きがあるかを分析する。

## 2.2 データ収集方法

本論文で用いるデータは CAbank 1 内の CALLFRIEND Japanese2コーパス及び CALLFRIEND Zh-Madarin3コーパスの電話会話から切り取った断片である。書き起こしは会話分析の手法を用いる。

## 3. 「的」の会話における機能

	発話環境	機能	意図・目的
情報伝達発話	話し手が K+	認 識 的 権 威 を 示 す	聞き手に自分のアドバイスを受けてもらう 聞き手に自分の情報の正確さを認めてもらう
	話し手が K-		聞き手の情報の正確さに対する不安や心配を取り消す 聞き手の情報の間違い・間違い認識を指摘する
評価連鎖	第一評価		聞き手に自分の評価的スタンス/認識的スタンスを納得させる 聞き手に自分が該当する話題・情報が既に知っているのを知らせる
	第二評価	聞き手の第一評価における間違い・不適切さを指摘する	

中国語文末詞「的」を考察した結果、「認識的権威を示す」という共通の機能があることが確認できた。ここでは、「話し手が K-」及び「第二評価」における「的」の例を挙げる。

### (1) [CallFriend 5905.cha 8:52] (話し手が K-)

- 01 A: 嗯 可以 去 钓鱼。  
うん できる 行く 釣り  
「うん、でも釣りに行ける。」
- 02 B: 那 是 什 么 东 西 啊?(0.3) 钓鱼 得 要 执 照 吧?  
あれ COP 何 もの Q 釣り べき いる 免許 Q  
「どういこと?釣りは免許がいるだろ?」
- 03 A: 嗯: 没 有(0.5) 钓鱼 (h) 哪 要 执 照 啊 (hh) =  
うん NEG ある 釣り どこ いる 免許 IP  
「うん、そんなことないよ。釣りに免許なんかいらないう。」

- 04 B: =废 什 么 话 钓鱼:(0.2)在 美国 钓鱼 打 野 鸭子  
無駄 何 話 釣り で 米国 釣り 狩る 野生 アヒル  
「バカ言うな。アメリカで釣りや、野生のアヒル、
- 05 打 鹿=  
狩る 鹿  
鹿を狩る時とか。」
- 06 A: =嗯.  
PRT  
「うん。」
- 07→B: 什 么: 抓 螃 蟹 都 要 执 照 的.  
何 捕まる カに すべて いる 免許 DE  
「なんか、カニを捕まえる時とかも、すべてに免許は必要だ。」
- 08 A: 噢.  
お  
「へえ!？」
- 09 B: 你 以 为 呢? 你 挺 牛 逼.  
2SG 思う PRT 2SG かなり 偉い  
「何だと思ってた?偉そうに。」
- 10 A: ¥哎?> 这 边 也 有 中 国 学 生 出 去 钓 鱼< 没 听  
INTJ ここも いる 中国 学生 出かける 釣り ない 聞く  
「え?ここも釣りに行く中国の学生がいて、
- 11 他 们 说 办 执 照.  
3PL 言う 取る 免許  
「免許はとるべきだということ全然聞いたことないって。」
- 12 B: 你 看 去 哪 儿 钓 了 他 们 偷 着 钓 谁 知 道 呢.  
2SG 見る 行くどこ 釣り PRT 3PL こっそり 釣り 誰 知る Q  
「どこで釣るかにもよるだろ。彼らこっそり釣ったら誰もわからないよ。」
- 13→ 一 般 来 说 都 要 有 执 照 的  
一 般 从 来 说 都 要 有 执 照 的  
一般 から 言う すべて べき ある 免許 DE  
「一般的に言えば免許は必要だ。」
- 14 A: 哦  
PRT  
「ふーん。」
- 15→B: 什 么 打 猎 啊 什 么 都 要 有 执 照 的=  
何 狩り PRT 何 すべて べき ある 免許 DE  
「狩りなり何なり、すべて免許が必要だ。」
- 16 A: =是 不 是 钓 了 鱼 还 得 扔 回 去 啊?  
COP NEG COP 釣る PRF 魚 また べき 投げる 戻す PRT  
「ってことは、魚が釣ってもまた元のところに戻すべきなの?」
- 17 B: 是 啊 当 然 啦 你 钓 的 不 够 大  
そう PRT 当然 PRT 2SG 釣る の NEG 足りる 大きい  
「そうだよ。もちろん貴方が釣ったのがまだ大きくなってない魚だから。」
- 18 就 得 扔 回 去.  
す と べき 投げる 戻す  
「元に戻すべきだ。」
- 19 A: 嗯.  
PRT  
「うん。」

<sup>1</sup><https://ca.talkbank.org/browser/>

<sup>2</sup><https://ca.talkbank.org/browser/index.php?url=CallFriend/jpn/>

<sup>3</sup><https://ca.talkbank.org/browser/index.php?url=CallFriend/zh-m/>

06 行目で、A は海辺で釣りができることを言った後、B は免許がいるだろう、という質問でさらに詳しい情報を求めている(話し手が自分を K<sup>-</sup>に位置付ける)。それに対して、B は笑いながら「没有钓鱼哪要执照啊 (そんなことはないよ。釣りって免許なんかいらんよ。)」と答えている。その直後、A は「废话什么钓鱼在美国钓鱼打野鸭子打鹿什么抓螃蟹都要执照的 (バカ言うな。アメリカで釣りとか、野生のアヒルや鹿を狩る、カニを捕まえるなど、すべて免許は必要だ。)」と B の情報の間違いを指摘している。

さらに 14 行目で「你以为呢?你挺牛逼 (じゃ、何だと思っていた?偉そうに)」と、先ほど B が自分をバカにしたように笑っている態度を咎めている。A の指摘を聞いたら、B はすぐに、自分の友達が免許を持っていなくても釣りに行けたことで弁解している。このような弁解を聞いて、A はその友達がこっそり釣っていたかもしれないと推測し、もう一度「一般来说都要有执照的 (一般的に言えば免許は必要だ。)」と自分の情報のほうが正しいと説得している。また 20 行目で「什么打猎啊什么都要有执照的 (狩りなり何なり、すべて免許が必要だ。)」と、その話題に関して自分は認識的権威を持っていることを示している。B も最初の知識上位の立場から下位に変化し、釣った魚は元に戻すべきかどうかについて A に教えを乞うようになっている。

(2) [CallFriend 4198.cha 15:46] (第二評価)

- 01 B: 哇= 这边儿 他妈 开车 都 他妈的 那个 挺野的.[你 PRT ここ くそ 運転 みんなくそ あの 乱暴 2SG 「うわー、ここね、車の運転は、あの、みんな乱暴だ。」
- 02 知道 吗? 知る PRT 「知っている?」
- 03 A: [対: そう そう 「そう
- 04 那 大城市:: 比较 野,>我们 这边 还 是 很 あれ 大都市 比較的 乱暴 1PL ここ また COP とても あそこは大都市だから乱暴だ。ここいつも大丈夫で、
- 05 → 好 (hh) [很 文明 的.] いい とても 文明 DE みんなしっかりルールを守っているよ。」
- 06 B: [是 吗 :: ] そう PRT 「そう。」

この断片で注目したいのは B が最初に自分が A よりもアメリカの運転習慣についてよく知っているという想定である。しかし、A は B の知識上の間違い (アメリカはすべて運転が乱暴だ) を指摘し、

05 行目で自分の住んでいる田舎のところは「很文明的 (みんなしっかりルール守っているよ。)」という第二評価を下し、B の第一評価 (この運転みんな乱暴だ) に反駁した。この例からわかるように、「第二評価+的」は認識的権威を示すことにより、相手の第一評価における間違い・不適切さを指摘する機能があることが観察された。

4. 「の(だ)」の会話における機能

	発話環境	機能	意図・目的
情報伝達発話	話し手が K+	「特に価値のある・予想外の情報」を提示する	聞き手に「特に価値のある情報」、「予想外の情報」を知らせる
	話し手が K-	認識的権威を示す	聞き手の情報に対する疑問・不安などを打ち消す 聞き手の間違い認識・想定を訂正する
評価連鎖	評価対象	相手との評価的スタンスを一致させる	評価対象を提出すると同時に、聞き手の評価対象に対する第一評価を促す
	第一評価		自分の評価的スタンスを示すと同時に聞き手の評価対象に対する第二評価を促す
	第二評価		話し手の評価的スタンスに理解・同調する
	協議		聞き手に自分の評価的スタンスに理解・賛成してもらおうとする

「の(だ)」は情報伝達発話において、「特に価値のある、予想外の情報を提示する」機能、及び「認識的権威を示す」機能があり、評価連鎖において、「相手との評価的スタンスを一致させる。」機能が観察された。ここでは、この三つの機能の例を挙げる。

(3) [CallFriend 1367.cha 00:10] (話し手が K+)

- 01 A: 一応これね:あの:ダラスでやっているんですけ[ど:さち  
02 さんも参加しませんか?  
03 B: [うん  
04 A: 国内:とね=  
05 B:うん  
06→A: 国際 (……) 十五分間各々十五分ずつただなの  
07 (0.3)  
08 B: あ:あ

この断片は、A が B に無料電話の利用規則について紹介している場面である。ここで注目したいのは、06 行目の「各々十五分ずつただなの。」である。情報伝達発話において、話し手 A は K+ である。B の「特に価値のある」情報に対する驚きに共感している。

(4) [CallFriend 4573.cha 00:06] (話し手が K<sup>-</sup>)

- 01 A: すいません  
02 B: はいはい  
03 A: あ : :  
04 B: >三十分なら話すっていうのは何をく  
05→A: [そうそう何でもいい  
の別にだから普通の世間話でいいの  
06 B: あ : ¥  
07 A: うん¥  
08 B: いわゆるペンシルバニア大学で=  
09 A: =の[ね↑ ]  
10 B: [ (… ) ]なの?これ  
11 A: >ペンシルバニア大学のなんか言語学研究室とかくって  
いうところが  
12 B: うん°

この断片は、B が A に無料電話の利用規則について確認している場面である。情報伝達発話において、話し手 B は K<sup>-</sup> であり、04 行目で A に質問した。すると、A は「そうそう何でもいいの。別にだから普通の世間話でいいの。」と答えた。B の質問をすべて聞き終わらないうちに答えたという行為からわかるように、A は「無料電話の利用規則」に関する情報にはかなり自信があるものと判断できる。それに、B の「何を話せばいいのか」という疑問を取り消すため、「の」を二回連続で使い、その情報に関して自分は認識的権威があることを示した。B もすぐ 06 行目で「あ : 」と、自分の知識状態の変化 (何を話すべきかがわかるようになったこと) を示すと同時に、A の認識的権威を受け入れた。A が 11 行目で「ペンシルバニア大学のなんか言語学研究室」というさらに詳しい情報を追加することも、自分が先ほど示した認識的権威を支えるための行為である。

(8) [CallFriend 1605.cha 15:46] (第二評価)

- 01 A: >なぜか知らないけど<雪が降ってもね(.)お日様が当たっ  
02 ているところは>とことこ溶ける<のね  
03 B: えー  
04 A: で陰のところはそのまま残っているの(0.2)もう=  
05 B: =それでアイス°っていうのですよあれ°  
06 A: そうそう[そうそう  
07 B: [ね:それで車が通るとつるん[と  
08→A: [危ないの[そこ  
09 B: [危ないの

この断片で、A と B はテキサス州の冬の天気について話している。01 から 04 行目まで、A は「雪が

溶けた後、陰のところに残っている」という事象を述べている。次に、B は 05 行目で「それでアイスっていうのですよあれ。」で、自分もそのような事象(雪が溶けた後アイスになる) ある程度知っていることを示した。その後、B は「雪が溶けた後アイスになる(07 行目)」という事象に対し、「車が通ると危ない」という評価を下そうとした。しかし、B の評価がまだ終わっていないうちに、A は先に「危ないの (08 行目)」で、B の言いようとした評価を下した。次の 09 行目の B の「危ないの」から、A の予測がっていると判断できる。ここで注目したいのは、A の 08 行目における「危ない+の。」で、第一評価の位置を奪い取ったが、実は第二評価で、話し手の主張した評価に理解・同調しようとしているものと見られる。

## 5. 結論

文末詞「的」及び「の(だ)」は、話し手と聞き手との間の相対的知識状態を反映し、特に情報伝達発話の「話し手が K<sup>-</sup> の場合」に「認識的権威を示す」機能が共通している。しかし、「的」はどのような発話環境においても、自分の認識的スタンス、即ち「自分は聞き手よりもその情報・評価対象についてよく知っている」ことを示すことが主要な機能である。一方、「の(だ)」においては情報に対する驚きの気持ちなどを聞き手に共感させ、評価的スタンスを一致させるといった「聞き手との共感・同調」を表す機能の方が重要であることが明らかになった。

## 参考文献

- 郭銳 (2000) 「表述功能的转化和“的”字的作用」  
『当代语言学 1』, 37-52.  
朱德熙 (1980) 『現代汉语语法研究』北京: 商務印書館  
杉村博文 (1982) 『『是…的』—中国語の「のだ」の文—』寺村秀夫他 (編) 『口座日本語学 12: 外国語との対照 III』明治書院, 155-172.  
Langacker, Ronald W (2008), *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press  
Hayano, Kaoru (2013). *Territories of knowledge in Japanese conversation*. Ph.D., Radboud University, Nijmegen.  
Heritage, John (2012), “Epistemics in action: Action formation and territories of knowledge.” *Research on Language and Social Interaction*, 45(1), 1-29.  
Pomerantz (1984), “Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shaped.” In: Maxwell, Atkinson J. and John Heritage. (eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press, 57-101